

県内訪問看護師のコラボレーティブ・ラーニングの可能性に関する研究

著者	堀 良子, 水口 陽子, 岡村 典子, 水澤 久恵, 平澤 則子, 橋本 明浩, 渡部 江里子
雑誌名	看護研究交流センター年報
巻	19
ページ	15-16
発行年	2008-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10631/418

県内訪問看護師のコラボレーティブ・ラーニングの可能性に関する研究

堀良子¹⁾，水口陽子¹⁾，岡村典子¹⁾，水澤久恵¹⁾，平澤則子¹⁾，橋本明浩¹⁾，渡部江里子²⁾

1) 新潟県立看護大学 2) 訪問看護ステーションテンダー上越

キーワード：訪問看護師，コラボレーティブ，ネットワークシステム

目的

上越地域4訪問看護ステーションと大学研究組織によるネット上掲示板の書き込み内容の分析・総括から学習コミュニティとしての可能性を探るための中間評価を得るとともに，県内訪問看護ステーションのコンピュータ利用環境とリテラシーに関する現状調査を目的とする。

研究方法

1. 掲示板（ブログ）内容の活用状況

平成19年4月～平成20年3月に，「訪問看護掲示板」に掲載されたブログ内容，およびその内容に対するコメントを対象データとして質的・帰納的に分析を行った。

2. ネットワーク参加者による意見聴取

平成20年3月に，フォーカスグループインタビューを実施し，話された内容から，ネットワークの成果，及び課題について質的・帰納的に分析を行った。

3. 県内訪問看護ステーションコンピュータ利用環境調査

平成20年2月～3月，県内訪問看護ステーション104施設を対象に，コンピュータ台数，インターネット環境，看護師のコンピュータリテラシー等について，郵送調査を行った。データ分析は，SPSS 16.0 J for Windowsにて記述統計を算出した。

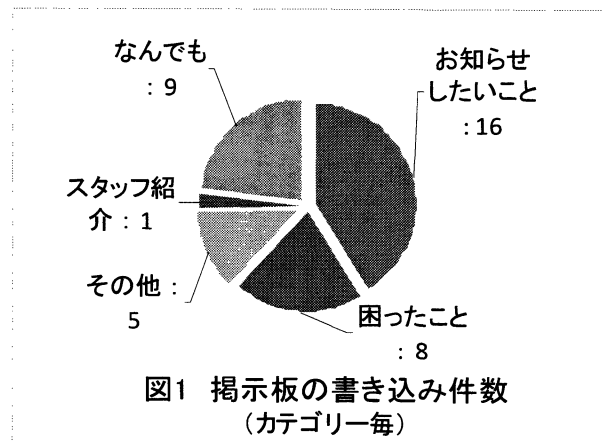
結果

1. 掲示板（ブログ）内容の活用状況

書き込み件数の内訳は，書き込み総数39件，コメント総数33件であった。カテゴリー毎の書き込み件数では，“お知らせしたいこと”が16件，“困ったこと”が8件であった（図1）。また，質問等の書き込みに対してのコメントも，33件あった。

2. ネットワーク参加者による意見聴取

ネットワーク参加者7名で行ったフォーカスグループインタビューから，5つのカテゴリーと12のサブカテゴリーが抽出された。参加者は，掲示板への書き込みを通して，“頑張ってみようかな”と『やる気への動機付け』を得るとともに，『双方向のやりとり』から【つながっている喜び】を感じていた。ただ，『入力操作』，『パソコンの設置場所』，『ネットワークへの入り方』が【パソコンと向きあう】ことに影響を与えていた。また，【情報交換】として『スピーディさ』を求めており，『ネットワークとは別の方法』を活用している現状や，『豊富な情報』の場としての期待があることがわかった。参加者は，『限られた時間』の中で『確認する日』を設定し【時間の調整】を行っていた。そして，『話題の柔軟性』や『使い分け』といった【内容の自由さ】を求めていることが分かった。



3. 県内訪問看護ステーションコンピュータ利用環境調査

調査書を送った 104 施設のうち、74 施設の管理者から回答があった（回収率 71.2%）。過去 1 年間に看護職員を研修会等に派遣した施設は 65 施設（87.8%）あり、派遣延べ人数は平均 9.7 人であった。派遣していないと回答した施設の理由として、人員不足、適切な研修の場が無い、といった記載がみられた。コンピュータ環境として、コンピュータ台数は 1 施設に平均 2.5 台あり、インターネットにも 52 施設（70.3%）が接続されていた。コンピュータネットワーク環境を作ることに、“非常に関心がある”に 14 施設（19.2%），“まあ関心がある”に 32 施設（43.8%）が回答した（図 2）。さらに、コンピュータ環境で学習しあえるシステムが、“是非あったら良い”が 26 施設（35.1%），“あったら良い”が 38 施設（51.4%）であった（図 3）。

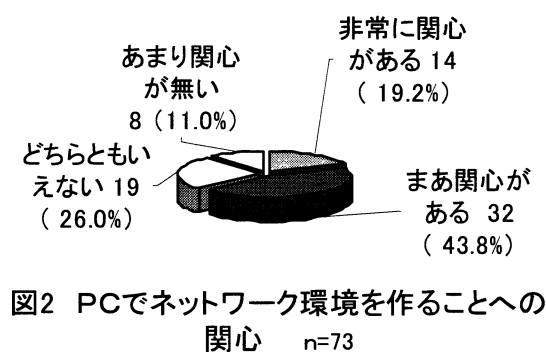


図2 PCでネットワーク環境を作ることへの関心 n=73

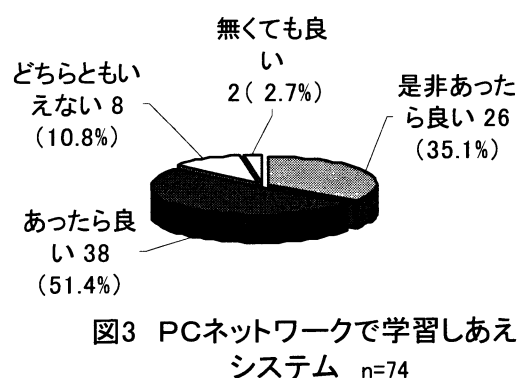


図3 PCネットワークで学習しあえるシステム n=74

考察

掲示板は、書き込み内容からお知らせといった情報交換の場として活用されていたが、『スピーディさ』といった点からは別の方法で交換が行われており、利便性・簡便性といった問題点が明らかになった。また、何か一つのテーマについて知識を共有する、あるいは議論する、といったコラボレーティブなやりとりは少なかった。このことは、インタビューでも語られており、『限られた時間』の中での難しさや、『パソコンの設置場所』といった外的要因も影響していると考えられた。ただ、書き込みへの返信による『双方向のやりとり』やメンバーの近況報告から『やる気への動機づけ』が起こっており、同じ立場のものとして支援し合える、学習コミュニティの場（中山，2005）が形成されたと考える。

今回の調査で、訪問看護ステーションが年間平均 10 人弱を研修に送り出している実態が分かり、このことから継続学習の必要性を感じていることが推察された。また、訪問看護師のネットワークシステムへの関心の高さが明らかになり、これは、回収率の高さにも表れていたと考えられる。この関心は、ネットワーク環境を作ることへの関心、そしてそれを通じて学習しあえるシステムへの関心の双方を反映していると思われた。各ステーションが保有しているパソコン台数が平均 2.5 台であることや、7 割のステーションでインターネットへの接続が可能であることから、ネットワーク環境作りへの可能性が示唆された。

文献

中山和弘（2005）：e ラーニングの今後の方向性と可能性－看護職と市民のオンライン学習コミュニティづくりへ。保健医療科学（J. Natl. Inst. Public Health），54(3)，187-193。